

精神科ソーシャルワーカーの行う アセスメント過程における活動と ストレングスに着目した活動との関連性 ——エンパワメントを基調とした精神保健福祉実践活動——

栄 セツコ

キーワード：精神科ソーシャルワーカー，アセスメント過程における活動，ストレングスに着目した活動

I. 研究目的

精神疾患を患った人（以下、精神障害者）のエンパワメントを目指したアプローチが推奨されてから久しいものの、精神障害者に対する偏見や施設コンフリクトなどに代表されるような抑圧的な状況は払拭されておらず、今後、より一層の精神障害者のエンパワメントを目指した実践の普及や展開が望まれている。

ソーシャルワーク領域におけるエンパワメントは、当事者運動や相互支援運動の隆盛、医学モデルから生活モデルへの転換、援助関係における専門職主導への批判、および抑圧された者に対する解放教育運動の普及などの影響をうけて、1976年にソロモン（Solomon, B. B.）が提唱して以来¹⁾、多くの研究者により論究されてきた^{2) 3) 4) 5)}。エンパワメントは、パワーレスな状況

にある人々が潜在的な適応力を強化することや抑圧的な環境や構造を変革することにより、個人的、対人関係的、社会的レベルといったマイクロレベルからマクロレベルで、そのパワーを発揮させていく過程や状態であると捉えられている⁶⁾。また、エンパワメントを基調としたソーシャルワーク実践の特徴として、マイリー (Miley, K. K.) はストレングスへの焦点化をあげている⁷⁾。さらに、コウガー (Cowger, C. D.) はストレングスに着目したアセスメント過程における実践活動がクライアントのエンパワメントに寄与するとし、その指針を12項目にわたって提示している⁸⁾。つまり、クライアント自身が生活課題の意味づけをし、クライアントとクライアントを取り巻く環境のストレングスを活用しながら、主体的に問題解決に向かうことができるようなアセスメント活動を行うことによって、クライアントの自己肯定感や自己有用感、および自己効力感などが高まり、エンパワメントを図ることができるというのである。

では、精神保健福祉領域において、どのような実践活動が行われてきたのであろうか。

精神障害者の場合、精神疾患から生じる心身機能の低下、日常生活における活動の制限、社会資源の不足に起因する選択の機会のなさ、伝統的な医学

-
- 1) Solomon, B. B. (1976) *Black Empowerment: Social Work in Oppressed Communities*. Columbia University Press, New York.
 - 2) Gutierrez, L. M. (1990) Working with Women of Color: An Empowerment Perspective, *Social Work*, 35 (2), 149-153.
 - 3) Cox, E. O. & Persons, R. J. (1994) *Empowerment - Oriented Social Work Practice with the Elderly*, Brooks/Cole Pub Com, California.
 - 4) Miley, K., O'Melia, K., Dubois, B. (1996) *Generalist Social Work Practice An Empowerment Approach*. Allyn & Bacon. Boston.
 - 5) Lee, J. (1994) *The Empowerment Approach to Social Work Practice*, Columbia University Press, New York.
 - 6) *Ibid.*, 55.
 - 7) Miley, K., O'Melia, k., Dubois, B. (1996) *op. cit.*
 - 8) Cowger, C. D. (1994) Assessing Client Strengths: Clinical Assessment for Client Empowerment. *Social Work*, 39 (3), 262-268.

モデルにおける専門職主導型の治療関係，偏見などの抑圧的な環境，活動の制限や制度の未整備による経済力の低下（貧困，失業）など，個人的要因と環境的要因が相互に作用しあうなかで，精神障害者の自信喪失感，孤立無援感，学習無力感が強くなり，パワーレスな状態になることが指摘されている⁹⁾。特に，伝統的な医学モデルにおける専門職主導型の治療関係には，（治療をする）主体と（治療される）客体という構造が生じる¹⁰⁾。また，治療の目的は病理の消失や障害の軽減におかれるが，その治療や訓練の計画に精神疾患を患った本人が参加することはほとんどないため，自己肯定感や自己有用感および自己統制感を喪失し，結果的に，パワーレスの状態に追いやられてきたといえる。そのようななかで，精神科ソーシャルワーカー（Psychiatric Social Worker, 以下，PSW）は，「精神障害者の人権尊重」「人と状況の全体関連性」「生活者の視点」「自己決定の原則」を実践の価値とし，精神障害者のエンパワメントを目指して実践することが求められてきた。しかし，実際に，PSW がエンパワメント・アプローチを基調としたアセスメント過程における精神保健福祉実践活動（以下，アセスメント活動）やストレングスに着目した実践活動をどの程度行っているのか，また，どのようなアセスメント活動がストレングスに着目した活動に関連しているのかを明らかにした実証的研究はほとんどない。

そこで，本論文の目的は，PSW が行うアセスメント活動とストレングスに着目した活動の実践頻度と，両者の活動の関連性を明らかにすることにした。これらの点を明確にすることで，PSW がエンパワメント・アプローチを基調としたアセスメント活動で留意すべき点が明らかになると考えられる。

尚，本論文では，精神保健福祉実践活動における PSW とのかかわりにお

9) 栄セツコ (2005) 「精神障害者エンパワメント・アプローチ—パワーの喪失に関連する要因—」『桃山学院大学社会学論集』39 (1), 153-173.

10) Saleebey, D. (1996) The Strengths Perspective in Social Work Practice: Extensions and cautions, *Social Work*, 41 (3), 296-305.

いては「クライアント」という言葉を使用し、そのかわりが精神疾患を患った人に特化した場合は「精神障害者」という言葉を使用した。

Ⅱ. 方法

1. 対象者と調査方法

調査対象者は、大阪精神保健福祉士協会、京都精神保健福祉士協会、大阪市精神保健福祉相談委員会の各会員、大阪府保健所・支所の精神保健福祉担当職員の合計818名である。質問紙回収の際、所属が重複しないように配慮して回収を行った。

調査方法は横断的調査法であり、自記式質問紙を用いた郵送調査を実施した。調査期間は2002年8月1日から31日までである。有効回収票は485票であり、有効回収率は59.3%だった。

2. 測定尺度と調査項目

まず、先行研究をもとに^{11) 12) 13) 14) 15) 16)}、アセスメント活動を「クライアントの生活課題に関する情報を収集する際、PSWはその状況におけるクライアントに共感しながら、クライアントに対する正確な理解を深め、信頼関係を形成する。そして、人と状況の全体関連性の観点から、クライアントが自

11) Meyer, C. (1993) *Assessment in Social Work Practice*, Columbia University Press, New York.

12) 太田義弘 (1995) 「ソーシャルワークにおけるアセスメント」『ソーシャルワーク研究』20 (4), 260-266.

13) 平山 尚 (1998) 「社会福祉実践のアセスメント」『社会福祉実践の潮流』ミネルヴァ書房, 189-244.

14) J. ミルナー P. オバーン著 杉本敏夫・津田耕一監訳 (2001) 『ソーシャルワーク・アセスメント 利用者の理解と問題の把握』ミネルヴァ書房.

15) 中村佐織 (2002) 『ソーシャルワーク・アセスメント』相川書房, 23-56.

16) 栄セツコ (2005) 「エンパワメント・アプローチにおけるアセスメント過程—精神科ソーシャルワーカーが行う精神保健福祉実践活動に着目して」『桃山学院大学社会学論集』38 (2), 29-49.

らの生活課題を意味づけし、クライアントとその環境のストレングスを活用した問題解決に対する意欲を高め、クライアントの自己決定に基づく援助計画の立案が可能になるように支援する活動」と定義した。そして、『クライアントの理解を図るための信頼関係の形成に関する活動』の6項目、『援助計画の立案におけるクライアントの自己決定の支援に関する活動』の10項目、『クライアントの理解および援助計画の立案に必要な情報収集に関する活動』の25項目、合計41の項目を作成した(表1)¹⁷⁾。これらの質問項目は、大阪精神保健福祉士会の運営委員会¹⁸⁾および精神保健福祉領域のエキスパート2名によってレビューをうけており、内的妥当性はあると判断した。また、質問項目に対する回答には「ほとんど行っている(4点)」「ときどき行っている(3点)」「あまり行っていない(2点)」「ほとんど行っていない(1点)」の4つの選択肢を設定した。アセスメント活動の構造をみるためこの41項目を因子分析した結果、7因子が抽出された¹⁹⁾。各因子の尺度の信頼性を示す α 係数は0.70以上だったため、内的一貫性もあると判断した。そして、これらの7因子を『クライアントの信頼関係の形成に向けた個別支援活動』『社会資源の基本的な情報に関する情報収集活動』『クライアントの生活の全体性に関する情報収集活動』『クライアントの危機状況に関する情報収集活動』『グループの一構成員としての参与観察活動』『さまざまな入手経路を活用した情報収集活動』『クライアントの自己決定に関する個別支援活動』と命名した。

次に、先行研究をもとに²⁰⁾ ²¹⁾ ²²⁾ ²³⁾ ²⁴⁾、PSWの行うストレングスに着目し

17) 栄セツコ(2005)上掲論文。

18) 大阪精神保健福祉士協会の運営委員会において質問項目の内容や文言の使い方などについて検討した。運営委員会のメンバーはPSWの実践者23名で構成されており、その経験年数は「10年未満」は8人、「10年以上20年未満」は5人、「20年以上」は10人である。

19) 栄セツコ他(2003)「精神科ソーシャルワーカーのアセスメント過程における精神保健福祉実践活動：その構造と関連要因」『生活科学誌』, 241-251.

20) Cowger, C. D. (1994) *op. cit.*

表1 PSW のアセスメント（過程における精神保健福祉実践）活動

<p>クライエントの理解を図るための信頼関係の形成に関する活動 6項目</p> <ul style="list-style-type: none"> ・関わり初期は、問題の解決よりも、問題を抱えているクライエント自身へ共感することに重点をおいている。 ・クライエントが感じている気持ちをわかちあうように心がけ、今後の対処の仕方を自分のことのように考えている。 ・クライエント本人の言動や表情以外に、本人が言語化していない気持ちも理解するように努めている。 ・クライエントがあなた自身に対して抱いたネガティブな感情も受け止めるようにしている。 ・クライエントの発した言葉が理解しにくいときは、あなた自身の理解の仕方が間違っていないかを本人と確認している。 ・クライエントの発言に対し、クライエントの心理的な内面に焦点をあてて分析するよりは、現実的な生活を支援していく上で必要と考える解釈の仕方を行っている。
<p>クライエントの理解および援助計画の立案に必要な情報収集に関する活動 25項目</p> <p>入手経路</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域にある人脈や社会資源を把握するため、民生委員・ボランティアなどから情報を集めている。 ・地域にある人脈や社会資源を把握するため、地域の関係機関から情報を集めている。 ・地域にある人脈や社会資源を把握するため、クライエント本人や家族から情報を集めている。 ・クライエント本人の全体像を把握するため、本人と関わっている人から話をきいている。 <p>方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クライエントに質問の意図を説明してから、本人に話をきくようにしている。 ・家庭訪問時には、クライエント本人に詮索しないで、生活状況を把握するようにしている。 ・グループ活動では、メンバーの一員として関わりながら、メンバー一人ひとりの変化やメンバー同士の動きにも注目している。 ・メンバー同士の会話の流れや個々のメンバーの思いや言動などから、その場の全体の雰囲気を知っている。 ・家族とクライエント本人の双方の話から、本人を中心とした全体的な家族像を把握するように努めている。 <p>内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日頃の会話の中で、危機状況時において、クライエント本人が希望する対応の仕方を一緒に話し合っている。 ・日頃の会話の中で、クライエント本人が過度にストレスを感じる状況（危機状況）を一緒に確認している。 ・日頃から、様々な場面において、クライエントの考え方、感じ方、他者との関係のとり方などを把握するように努めている。 ・日頃から、さまざまな場面で、クライエント本人のできることやできないことを把握するように努めている。 ・日常の関わりの中で、クライエント本人が上手に医療を利用できる方法について、一緒に話し合っている。 ・クライエントとの日常的な関わりの中で、クライエントの服装、身だしなみ、姿勢、体格の変化などにも注意を払っている。 ・クライエントの失敗体験の原因を病気に求めるのではなく、クライエントの経験の少なさや経験する機会がなかった環境との関係から捉えるようにしている。 ・これまでのクライエントとの関わりについての情報は、あなたの記録から確認できるようにしている。 ・これまでどのような生活をし、今後どのような生活を送りたいのかという時間的な流れの中で、本人を理解するように努めている。 <p>援助計画の立案における資料づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クライエントが利用したい社会資源が、手ごろな料金であるか否かを確認している。 ・クライエントが利用したい社会資源が、待たずに利用できるか否かを確認している。 ・クライエントが利用したい社会資源が、継続して利用できるか否かを確認している。 ・クライエントが利用したい社会資源が、選択できる幅があるか否かを確認している。 ・クライエントが利用したい社会資源が、クライエントの生活している地域にあるかを確認している。 ・クライエントが利用したい社会資源が、利用することで後ろめたい気持ちになるか否かを確認している。 ・あなた自身の日頃の社会生活において、クライエントの利益になるものが何かないかに注意を払っている。
<p>援助計画の立案におけるクライエントの自己決定の支援に関する活動 10項目</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日頃の本人ではないような悲観的な決断を下した場合は、その決定をした本人の気持ちを受けとめ、今すぐ決定する必要があるれば、その決定を延ばすことも提案している。 ・クライエントが複数の選択肢で迷っている場合、ある選択肢を選ぶことで予測できる結果を説明しながら、クライエント本人が自己決定できるように支援している。 ・クライエントが自分の生活能力以上のことに取り組みうとするときは、取り組み後の予測される展開を共に話し合せて、いつでも相談することを本人と確認している。 ・クライエントの希望する行動が、他人に害を及ぼす可能性がある場合は、その行動を修正するように促している。 ・クライエントの希望を最優先した関わりが、本人にどれだけリスクが生じるかも予測しながら関わっている。 ・本人が選択した仕事（役割）を、あなたが安易に代行するのではなく、本人にその仕事ができると信じて支援している。 ・クライエント本人がそろそろ自分一人できそうだと感じた時は、一人でやってみるように促しながら支持している。 ・クライエントの問題点を、あなたが指摘するのではなく、本人自身が気づくように促しながら話をきいている。 ・本人のプライバシーに関することでも、生命に関することや明らかに本人に不利益になるとあなたが判断した場合は、本人の許可なく第三者に相談することがある。 ・クライエントの不利益になるとあなたが判断した時、本人の意思を尊重しながら、あなたが気になる点を説明して、一緒に考えるようにしている。

た活動を「パワーレスな状態にあるクライアントの一人の人間としての成長や変化の可能性を信じ、個人と個人を取り巻く環境のストレングスに着目し、個人的レベル、対人関係的レベル、社会的レベルにおいて、それらのストレングスを十分に活用・強化しながら、自分らしい生活の営みが可能となるように支援していく活動」と定義した。そして、個人的レベルにおける『精神障害のある生活者に対する個別支援活動』の9項目、対人関係的レベルにおける『セルフヘルプグループなどの仲間同士の集団支援活動』の9項目、社会的レベルにおける『クライアントを取り巻く環境に対する改善・強化・開発などの地域支援活動』の12項目、合計30の項目を作成した(表2)²⁵⁾。質問項目の内的妥当性の確認および回答方法はアセスメント活動と同様である。そして、ストレングスに着目した活動の構造をみるためこの30項目を因子分析した結果、5因子が抽出された²⁶⁾。因子分析後の項目の内容妥当性を確認するために、精神保健福祉領域の2名の研究者によってエキスパート・レビューをうけた。また、尺度の信頼性を示す α 係数は第V因子を除いた4つの因子は0.75以上だったため、内の一貫性があると判断した。第V因子の α 係数は0.52とやや低い数値だったが、この因子は環境整備に関連する因子であり、精神障害者を取り巻く環境は未だ様々な障壁がある状況でPSWが重視すべき活動であると判断したため採用することにした。そして、これらの5因子

21) Saleebey, D. (1996) The Strengths Perspective in Social Work Practice; Extensions and Cautions, *Social Work*, 41 (3), 296-305.

22) Rapp, C. A. (1998) *The Strengths Model*. Oxford University Press, New York.

23) Saleebey, D. (Ed.) (2002) *The Strengths Perspective in Social Work Practice* 3rd, Allyn & Bacon, Boston.

24) 栄セツコ他 (2004) 精神科ソーシャルワーカーのエンパワメント・アプローチに基づく精神保健福祉実践活動—ストレングスの観点から—『大阪市立大学生活科学部 児童・家族相談所紀要』69-81.

25) 栄セツコ (2004) 上掲論文.

26) 栄セツコ (2004) 精神科ソーシャルワーカーのエンパワメント・アプローチに基づく精神保健福祉実践活動：実践活動の現状とその活動を促進させる関連要因『生活科学誌』205-216.

表2 PSW のストレングスに着目した（精神保健福祉実践）活動

個人的レベル（9項目）	
・相互作用	：クライアントの病状や疾病だけではなく、それらと生活のしづらさとの関連についても把握するように努めている。
・相互作用	：問題行動に対して、その行動のみを責めることはせず、その行動を起こさざるをえなかった状況も尋ねるようにしている。
・相互作用	：クライアントが迷っている時は、その内容を確認しながら、安心して迷えるような雰囲気をつくるようにしている。
・ストレングス	：日頃の会話では、病気や障害の話だけではなく、クライアント本人の得意分野や関心事などに関する話もしている。
・ストレングス	：クライアントの問題点を把握しながらも、本人の健康的な部分（できること、可能なこと）を増やす関わりをしている。
・ストレングス	：クライアント本人が過去に起こした問題に焦点をあてるよりも、今ここから、できることを話し合っている。
・経験の拡大	：クライアントが初めての経験で失敗しても、それが貴重な経験であることを本人が認識できるよう支持している。
・経験の拡大	：本人が「できた」という成功体験を重ねることで、新しい経験にも挑戦する気持ちが高まるように支持している。
・経験の拡大	：今の生活の枠を広げることが不安なクライアントには、今の生活の枠を保障し、新しい体験を試すように促している。
対人関係のレベル（9項目）	
・出会いの提供	：様々な人と交流できるスペースをつくり、その場で同じ悩みをもつ人同士が語り合えるような雰囲気をつくっている。
・出会いの提供	：仲間意識が高まるために、メンバー同士の共通の話題をみつけ、それぞれが交流できる場を提供している。
・役割の提供	：クライアントが自分の仲間に役立つことができる機会を提供している。
・役割の提供	：自分が仲間にもたらして助かった経験をもつ人が、今度は困っている仲間を助けることができる機会を提供している。
・役割の提供	：クライアントにグループを紹介する際、グループのメンバーに活動の内容などを説明してもらうように働きかけている。
・役割の提供	：一見何の役割がないようにみえる人でも、重要な構成メンバーであることを所属内のメンバーと確認している。
・仲間意識	：クライアントが他人に頼られる経験をする中で、自分の存在の必要性を実感してもらえる機会をつくるようにしている。
・仲間意識	：ミーティングでは、ささいな意見でも、メンバー全員で、その意見について話し合うようにしている。
・仲間意識	：本来の仲間の機能をメンバーに説明することで、仲間同士が相互に助け合うことに気づけるようにしている。
社会的レベル（12項目）	
・ネットワーク形成	：本人の希望があれば、本人が利用する窓口の担当者に前もって連絡し、面接がスムーズに進むように調整している。
・ネットワーク形成	：クライアント本人にとって利益がある場合は、他職種や関連機関と連携を図るように努めている。
・ネットワーク形成	：本人の生活を維持する社会資源がなければ、あなた自身が代替できるものがみつかるまで補足的に支援している。
・ネットワーク形成	：家族の不安を軽減するために、その気持ちを受け止め、家族がその不安を整理できるように支持している。
・ネットワーク形成	：家族の不安を軽減するために、必要に応じて、家族教室や家族会を紹介している。
・人的資源の開発	：ボランティアの個人的なネットワークを、精神医療保健福祉領域でも生かせるように働きかけている。
・人的資源の開発	：ボランティアを導入するときは、ボランティア自身にボランティアの必要性を説明している。
・人的資源の開発	：ボランティアの活動上の不安（関わり方・対応の仕方など）にも応じている。
・人的資源の開発	：何をしたいのか戸惑っているボランティアには、自分の得意分野を披露してもらうようにしている。
・人的資源の開発	：当事者の体験談から、市民ひとりひとりが自分の問題として考える機会をつくるようにしている。
・環境整備	：本人のライフステージに関係する人（学校の教師、職場の上司など）とも、必要時には、積極的に関わるようにしている。
・環境整備	：本人の問題行動を責めるのではなく、本人を取り巻く環境に焦点をあて、問題行動がでにくいような環境に改善している。

を『精神疾患を体験した者同士の相互支援を重視した集団支援活動』『クライアントの強さや持ち味が発揮できる個別支援活動』『市民の意識改革の促進を目指した地域支援活動』『クライアントのネットワークの強化を目指した地域支援活動』『クライアントを取り巻く環境整備を目指した地域支援活動』と命名した。

そして、アセスメント活動とストレングスに着目した活動のそれぞれの活動を構成している因子の実践頻度を明らかにするために各因子の平均値を算出し、さらに、アセスメント活動の7つの因子とストレングスに着目した活動の5つの因子間において、関連の高い因子をみるため、相関係数0.5以上のものを選択することにした。

Ⅲ. 結果

1. 回答者の個人要因（表3）

性別は「男性」が33.2%、「女性」が66.8%である。年齢では「20歳代」と「30歳代」とで59.4%だった。精神保健福祉士の有資格は85.8%である。ケース数は「20ケース以下」が36.1%で最も高く、経験年数では5年未満が38.4%を占めていた。所属機関では「医療機関」が42.5%と最も高く、続いて「保健所など」の22.5%、「社会復帰施設」の13.0%だった。

2. PSW の行うアセスメント活動とストレングスに着目した活動

1) PSW の行うアセスメント活動の実践頻度（表4）

アセスメント活動の実践頻度をみるため、7つの因子の平均値を算出した。その結果、『クライアントの自己決定に関する個別支援活動』が3.44点で最も高く、続いて『クライアントの信頼関係の形成に向けた個別支援活動』の3.36点、『グループの一構成員としての参与観察活動』の3.35点だった。反対に、『さまざまな入手経路を活用した情報収集活動』は2.78点で最も低く、次いで『クライアントの危機状況に関する情報収集活動』の3.02点だった。

表3 回答者の個人要因

		N=485 (人)	割合 (%)
性別	男性	151	33.2
	女性	334	66.8
年齢	20歳代	159	32.8
	30歳代	129	26.6
	40歳代	120	24.8
	50歳代	71	14.6
	60歳以上	6	1.2
精神保健福祉士の資格	なし	69	14.2
	あり*	416	85.8
所属機関	医療機関	206	42.5
	社会復帰施設	63	13.0
	保健所など	109	22.5
	その他	107	22.0
担当ケース数	20ケース以下	175	36.1
	21-40ケース	141	29.1
	41-60ケース	72	14.8
	61ケース以上	97	20.0
経験年数	2年未満	66	13.6
	2年-5年未満	120	24.8
	5年-10年未満	117	24.1
	10年-20年未満	102	21.0
	20年以上	80	16.5

* 精神保健福祉士の資格「あり」のうち、現任者講習受講者は70.5%だった。

表4 アセスメントを構成する各因子の平均値と標準偏差

因子名	平均値	標準偏差
第I因子 社会資源の基本的な情報に関する情報収集活動	3.19	.75
第II因子 クライアントの自己決定に関する個別支援活動	3.44	.49
第III因子 さまざまな入手経路を活用した情報収集活動	2.78	.66
第IV因子 クライアントの信頼関係の形成に向けた個別支援活動	3.36	.48
第V因子 クライアントの生活の全体性に関する情報収集活動	3.07	.60
第VI因子 クライアントの危機状況に関する情報収集活動	3.02	.75
第VII因子 グループの一構成員としての参与観察活動	3.35	.80
全体の平均値	3.17	.47

2) PSW の行うストレングスに着目した活動 (表 5)

ストレングスに着目した活動の実践頻度をみるため、5つの因子の平均値を算出した。その結果、『クライアントの強さや持ち味が発揮できる個別支援活動』が3.45点で最も高く、続いて『クライアントのネットワークの強化を目指した地域支援活動』の3.17点、『精神疾患を体験した者同士の相互支援を重視した集団支援活動』の2.59点、『クライアントを取り巻く環境整備を目指した地域支援活動』の2.54点、『市民の意識改革の促進を目指した地域支援活動』の2.10点だった。

3) PSW の行うアセスメント活動とストレングスに着目した活動との関連性 (表 6)

PSW の行うアセスメント活動の7つの因子なかで、『クライアントの自己決定に関する個別支援活動』『クライアントの信頼関係の形成に向けた個別支援活動』『クライアントの危機状況に関する情報収集活動』『グループの一構成員としての参与観察活動』の4因子にストレングスに着目した活動と高い相関がみられた。以下、それぞれの結果をみていく。

① クライアントの自己決定に関する個別支援活動

アセスメント活動における『クライアントの自己決定に関する個別支援活動』は、『クライアントの強さや持ち味が発揮できる個別支援活動』『市民の意識改革の促進を目指した地域支援活動』『クライアントのネットワークの強化を目指した地域支援活動』『クライアントを取り巻く環境整備を目指した地域支援活動』との因子間に非常に高い相関がみられた。

② クライアントの信頼関係の形成に向けた個別支援活動

PSW のアセスメント活動における『クライアントの信頼関係の形成に向けた個別支援活動』の因子は、『精神疾患を体験した者同士の相互支援を重視した集団支援活動』の因子との間に高い相関がみられた。

③ クライアントの危機状況に関する情報収集活動

表5 ストレngthsに着目した活動を構成する各因子の平均値と標準偏差

因子名	平均値	標準偏差
第Ⅰ因子 精神疾患を体験した者同士の相互支援を重視した集団支援活動	2.59	.81
第Ⅱ因子 クライエントの強さや持ち味が発揮できる個別支援活動	3.45	.52
第Ⅲ因子 市民の意識改革の促進を目指した地域支援活動	2.10	.95
第Ⅳ因子 クライエントのネットワークの強化を目指した地域支援活動	3.17	.62
第Ⅴ因子 クライエントを取り巻く環境整備を目指した地域支援活動	2.54	.75
全体の平均値	2.77	.55

表6 PSWのアセスメント活動とStrengthsに着目した活動との相関関係

アセスメント活動 /Strengthsに 着目した活動	第Ⅰ因子 基本的な情報 の収集活動	第Ⅱ因子 自己決定の個 別支援活動	第Ⅲ因子 入手経路活用 の収集活動	第Ⅳ因子 信頼関係の形 成活動	第Ⅴ因子 生活の全体性 の収集活動	第Ⅵ因子 危機状況の情 報収集活動	第Ⅶ因子 グループの 参与観察活動
第Ⅰ因子 集団支援活動	.294***	.408***	.433***	.639***	.181***	.330***	.592***
第Ⅱ因子 個別支援活動	.470***	.751***	.482***	.434***	.351***	.581***	.426***
第Ⅲ因子 市民意識改革	.470***	.751***	.482***	.434***	.351***	.581***	.426***
第Ⅳ因子 ネットワーク強化	.470***	.751***	.482***	.434***	.351***	.581***	.426***
第Ⅴ因子 環境整備	.470***	.751***	.482***	.434***	.351***	.581***	.426***

***p<.001

アセスメント活動における『クライエントの危機状況に関する情報収集活動』は、『クライエントの強さや持ち味が発揮できる個別支援活動』『市民の意識改革の促進を目指した地域支援活動』『クライエントのネットワークの強化を目指した地域支援活動』『クライエントを取り巻く環境整備を目指した地域支援活動』と高い相関がみられた。

④ グループの一構成員としての参与観察活動

アセスメント活動の『グループの一構成員としての参与観察活動』は、『精神疾患を体験した者同士の相互支援を重視した集団支援活動』と高い相関がみられた。

IV. 考察

1. 本研究の有効性

本研究により、PSW が行うエンパワメント・アプローチを基調とした実践において、ストレングスに着目した活動の個人的レベルと社会的レベルの活動は、アセスメント活動の『クライアントの自己決定に関する個別支援活動』や『クライアントの危機状況に関する情報収集活動』と関連が高く、また、ストレングスに着目した活動における対人関係的レベルの活動は、アセスメント活動の『クライアントの信頼関係の形成に向けた個別支援活動』『グループの一構成員としての参与観察活動』と関連が高かった。このことにより、PSW がストレングスに着目した活動を実践する際、各レベルにおける有効的なアセスメント活動の着眼点が示唆され、今後の実践や研修などに寄与することができると考えられる。

2. PSW の行うアセスメント活動の実践頻度

PSW のアセスメント活動の実践頻度の平均値をみると、7つの因子のなかで『クライアントの自己決定に関する個別支援活動』と『クライアントの信頼関係の形成に向けた個別支援活動』の実践頻度が相対的に高かった。PSW が行う自己決定の支援は、クライアントの自己実現を目指した活動であり、自己決定の原則というPSW の実践の価値に基づいた活動である。精神障害者の場合、①病状や障害による一時的な思考力や判断力の低下、②（思春期や青年期に精神疾患が発病することが多く）社会生活の経験不足による情報量の少なさ、③家族をはじめとする周囲の保護的な環境による自己決定の機会の少なさ、④自己決定における適切な選択肢の少なさ、などの理由から自己決定の支援を必要とすることが少なくない²⁷⁾。そこで、PSW が

27) 栄セツコ（2003）「自己決定と自己覚知」『精神保健福祉士の価値について』日本

クライアントの自己決定を尊重する態度や姿勢によって、クライアントの主體的な問題解決への意欲や能力が高まることが指摘されていることから²⁸⁾、重要な支援といえる。また、クライアントとの信頼関係の形成は、援助関係の基盤となる重要な活動であり、PSW とクライアントとの相互理解を図るうえで必須といえる活動である。これらの実践頻度の得点が高かったことは、本調査の回答者はPSW の実践における価値やクライアント主導のアセスメントに対する意識が高いと考えられる。

一方、『さまざまな入手経路を活用した情報収集活動』の実践頻度が相対的に低かったことは、PSW の業務が個別支援を中心として行われる傾向があるため、クライアントに関する情報の入手経路がクライアント本人に限定されてしまい、クライアントとかかわりのある人や機関から情報を入手することが少ないことが考えられる。また、『クライアントの危機状況に関する情報収集活動』の実践頻度が相対的に低かったことは、PSW の日頃の活動において、クライアントの危機状況に関する情報収集を行う必要性があまり感じられないことや、チームアプローチの普及により他職種・他機関からクライアントの危機状況に関する情報を共有する機会が増えたため、この活動の頻度が低くなったことが考えられる。また、近年における生活モデルの推奨やストレングス観点への強化などからも、健康的な部分や得意分野などの情報が重視されているため、危機状況に関する情報収集の実践頻度が低くなったものと考えられる。

3. PSW の行うストレングスに着目した活動

PSW の行うストレングスに着目した活動の実践頻度の平均値をみると、『クライアントの強さや持ち味が発揮できる個別支援活動』が最も高かった。従来から、PSW は精神障害者を生活者と捉え、その病理や障害の軽減に着

精神保健福祉士協会精神障害者福祉研究委員会, 107-113.

28) 荒田 寛 (2002) 「PSW の役割と課題」『社会福祉研究』第84号, 50-57.

目するだけではなく、健康的な部分や可能性に着目し、それらの増強や拡大を目指して実践してきた実績がある。このような考え方や実践が精神障害者のエンパワメントに寄与することが、PSW 間に普及されてきたため^{29) 30) 31)}、『クライアントの強さや持ち味が発揮できる個別支援活動』の実践頻度が高くなったと考えられる。一方、『市民の意識改革の促進を目指した地域支援活動』の実践頻度が相対的に低かったことは、我が国の精神保健福祉の状況に関連していると考えられる。まず、我が国の精神病院の9割が民間病院に委ねられている状況で、本調査における回答者の約4割が医療機関に所属していた。このことは、PSWの業務が所属機関の運営方針から制限を受ける可能性があることや、病院の機能分化に応じて、PSWの業務そのものが断片化してしまうため、市民の意識改革といった間接的援助を行うことが難しい状況にあることが考えられる。また、精神障害者の福祉施策の遅れが地域住民の精神障害者に対する偏見や無理解を生み、今なお、精神障害者の社会復帰施設建設への反対運動が少なくない現状のなかで³²⁾、地域におけるボランティア活動そのものが活性化されず、PSWがボランティアのコーディネートを行うまでに至っていない状況にあることも、この活動の頻度が低くなった一因と考えられる。

3. PSWの行うアセスメント活動とストレングスに着目した活動との関連性

1) クライアントの自己決定に関する個別支援活動

PSWがアセスメント過程で行う自己決定の支援は、ニーズの充足に対し

29) Rapp, C. A. (1998) *op. cit.*

30) 谷中輝雄 (1996) 「生活支援の考え」 谷中輝雄『生活支援 精神障害者生活支援の理念と方法』やどかり出版, 143-159.

31) 栄セツコ・菅野治子 (2001) 「デイケア活動のこれから—浅香山デイケア・サロンの試み」 岩堂美智子・松島恭子他編『コミュニティ臨床心理学』創元社, 225-233.

32) 栄セツコ (1998) 「精神保健ボランティア活動に関する研究」『社会福祉学』Vol.39 (1), 176-192.

て、クライアント自身が多種多様な社会資源のなかから最適な選択肢を決定できるように支援することを意味する。PSW の具体的な支援をあげると、クライアントが社会資源の利用を拒否している場合は、クライアントの気持ちに寄り添い、その拒否する背景を共有しながら不安を軽減できるように支援したり、また、クライアントが社会資源を知らない場合は、クライアントがイメージできるような言葉で社会資源を提示したりする。さらに、クライアントが複数の選択肢から一つを選ぶことが困難な場合は、それぞれの選択肢を選んだあとの予測をクライアントと一緒に考えながら、最適な選択ができるように支援を行う。ここで示す社会資源に関して、ストレングスモデルを提唱したラップ (Rapp, C. A.) はクライアント自身とクライアントを取り巻く環境の双方の資源を明記している³³⁾。前者には、クライアント自身の熱望、能力、関心ごと、社会経験や疾病経験などがあり、その人の持ち味といえるものである。後者には、資源 (資産やサービス)、社会関係 (家族、友人、知人などのつきあいから生じる利益)、機会 (地域にある利用できる機会) などがある。PSW はクライアントの自己決定の支援の際に、適切に社会資源を提示できるように、日頃よりクライアントに内在しているストレングスを引き出すことや、クライアントを取り巻く環境にある多種多様な社会資源を認知しておくこと、および社会資源が有効に機能できるように環境に働きかけていることが推測できる。たとえば、クライアントのストレングスが発揮できるように、得意分野や関心ごとをきくことや健康的な部分を拡大できるようにかわること、成功や失敗にかかわらず「経験」そのものという意味があるという認識を得てもらふことなどがあげられる。一方、精神障害者を取り巻く抑圧的な環境のなかで、クライアントが自己決定できるように、PSW は家族の支援や他機関とのネットワークの調整・強化、当事者による市民啓発の機会の提供などの活動を行っていることが推測できる。

33) Rapp, C. A. (1998) *op. cit.*, 1-23.

以上のことから、PSWのアセスメント活動における『クライアントの自己決定に関する個別支援活動』は、ストレングスに着目した活動の『クライアントの強さや持ち味が発揮できる個別支援活動』『市民の意識改革の促進を目指した地域支援活動』『クライアントのネットワークの強化を目指した地域支援活動』『クライアントを取り巻く環境整備を目指した地域支援活動』の4つの因子と高い相関がみられたものと考えられる。

2) クライアントの信頼関係の形成に向けた個別支援活動

アセスメント活動における『クライアントの信頼関係の形成に向けた個別支援活動』は「共感」「無条件の受容」「ノンバーバルな言語の理解」などから構成された因子であり、援助関係の基盤となる活動である。信頼関係が形成されるにつれて、クライアントはPSWに自らのことを語るようになり、そのことによって、PSWはより正確にクライアントを理解できるようになる。そして、PSWのクライアントの理解により、クライアント自身が「PSWに自分のことをわかってもらえた」という安心感が生まれる。そのようなクライアントの感情や認識が重なることで、PSWに徐々に信頼を寄せるようになり、クライアントのワーカビリティが高まっていくことが推測できる。このように、PSWの信頼関係の形成に向けた活動は、両者の相互理解のなかで、クライアント自身が生活課題を解決していくことを目指した活動であり、そこには、PSWの一人の人間に対する変化の可能性や、適切な機会さえあれば人は誰でも自身の問題を解決することができるという人間観、精神障害者は疾病や障害を併せ持つが、そのほかの多くの部分は健康的なものをもつ普通の市民であるという精神障害者観があるといえる。このような価値観をもつPSWは、クライアントの可能性や経験知が精神障害のある仲間同士のなかで生かせるように、仲間に役立つ機会の提供や交流できる機会の提供などを行っていることが推測できる。実際に、精神疾患を体験した仲間の存在は、精神疾患を患うことで生じた苦しみの分かち合いや精神疾患を

患うことで体得した知恵の交換, その伝承を通して, 精神障害者の自尊心や自信の向上, 希望や勇気の回復, 問題の対処能力の向上などの成果があることが報告されている³⁴⁾ ³⁵⁾。このような共通の課題のあるグループはエンパワメント・アプローチでは重要な要素として位置づけられており, クライエントのエンパワメントには欠かせないものとなっている。このことから, PSW のアセスメント活動における『クライアントの信頼関係の形成に向けた個別支援活動』は『精神疾患を体験した者同士の相互支援を重視した集団支援活動』との間に高い相関がみられたものと考えられる。

3) クライエントの危機状況に関する情報収集活動

PSW のアセスメント活動における『クライアントの危機状況に関する情報収集活動』は、「クライアント自身が危機に陥りやすい状況」や「クライアントの危機状況における対処方法」に関する情報を収集する活動である。精神障害者の場合, 疾病と障害に環境が影響するという特性があるなかで, 利用できる社会資源が少ないうえ, その資源が断片化していること, および未だ精神障害者に対する偏見が強い現状にあることから危機状況に陥りやすい状況にある。そのため, PSW はクライアントが危機状況に対処できるように, 生活技能訓練や心理教育などを実施していることが少なくない。生活技能訓練や心理教育はクライアントのセルフケア能力の向上や多様な対処方法の獲得といったストレングスを強化することになり, 結果的に危機状況に対処できるようになることが言われている。また, 危機状況に迅速に対応できる環境づくりでは, PSW はいざという時に有機的にネットワークが稼働できるように, 日頃より社会資源間の調整を行うことや, 同じ市民として助

34) Parsons, R. J. (1991) Empowerment: Purpose and Practice Principles in Social Work. *Social Work With Groups*, 14 (2), 2-21.

35) 岩田泰夫 (1996) 「セルフヘルプグループにおけるエンパワメント」『こころの臨床』9, 25-30.

け合えるようにボランティア活動の支援を行っていることが考えられる。このようなことから、アセスメント活動における『クライアントの危機状況に関する情報収集活動』は『クライアントの強さや持ち味が発揮できる個別支援活動』『市民の意識改革の促進を目指した地域支援活動』『クライアントのネットワークの強化を目指した地域支援活動』『クライアントを取り巻く環境整備を目指した地域支援活動』と高い相関がみられたものと考えられる。

4) グループの一構成員としての参与観察活動

PSW のアセスメント活動における『グループの一構成員としての参与観察活動』は、PSW がグループを構成する一員として参加することで、個々のメンバーの変化やメンバー同士の動き、および個々のメンバーの動きからグループ全体の力動関係を観ることができる活動である。また、参与観察は、社会調査法のなかでもクライアントの日常生活の様子やその変化を垣間みることができるだけでなく、観察者自身の体験も情報の素材となるという特徴があることから³⁶⁾、PSW 自身がグループのメンバーとのかかわりから学んだことも重要な情報となることができる。そして、このような個々のメンバーやグループのストレングスを把握した PSW は、これらを仲間同士の相互支援に生かすことが推測できることから、アセスメント活動の『グループの一構成員としての参与観察活動』が『精神疾患を体験した者同士の相互支援を重視した集団支援活動』と高い相関がみられたと考えられる。

V. 今後の課題

1. PSW の精神保健福祉実践活動の課題

アセスメント活動における『クライアントの危機状況に関する情報収集活動』は、『クライアントの強さや持ち味が発揮できる個別支援活動』『市民の

36) 永野 武 (1999)「質的調査の方法」大谷信介・木下栄二・永野武他編『社会調査へのアプローチ 調査と方法』ミネルヴァ書房, 189-244.

意識改革の促進を目指した地域支援活動』『クライアントのネットワークの強化を目指した地域支援活動』『クライアントを取り巻く環境整備を目指した地域支援活動』と高い相関がみられた重要な活動であるにもかかわらず、その実践頻度は相対的に低かった。先述のように、精神障害者は個人を取り巻く環境が疾病や障害に影響するという特性から、PSW がクライアントと危機状況に陥りやすい状況や要因および対処方法について一緒に考えることは、クライアント自身のセルフケア能力の向上に対する意識やリハビリテーションプログラムへの参加の動機を高めることができると考えられる。ひいては、援助計画の作成においても、クライアント自身が自分の限界を踏まえながら実現可能な計画立案が可能となることから、クライアントのエンパワメントに寄与することが考えられる。このようなことから、今後、PSW はアセスメント活動において『クライアントの危機状況に関する情報収集活動』の実践頻度を高めるために、日頃のクライアントとのかかわりやチームにおける情報交換などにおいて、クライアントの危機状況に関する情報収集を意識しながら行うことが望まれる。

2. 本調査の限界

最後に、本研究の限界を述べる。第1点目は、本研究の調査対象者が大阪および京都の関連団体に所属している者としたため、本研究の結果はこれらの地域のPSWの特徴が現れたものであり、全国のPSW全体の傾向を示すものではないということである。第2点目は、調査設計が横断的調査であるため、PSWのアセスメント活動とストレングスに着目した活動との間に明確な因果関係があると断定することができないということである。そのため今後、縦断的な調査を実施していく必要がある。第3点目は、PSWのアセスメント活動やストレングスに着目した活動に関する尺度は妥当性や信頼性は確認したものの暫定的なものであるため、その精神保健福祉実践活動の要素をすべて含んだ包括的な尺度ではないということである。第4点目は、本

研究で使用した精神保健福祉実践活動に関する尺度が PSW による自己評価に基づくものであるため、PSW 自身の実践活動を過小評価あるいは過大評価している可能性がある。

今後、以上のような課題を解決し、精神障害者のエンパワメントに寄与できる PSW の実践が望まれる。

The Association between Professional Behaviors in
Assessment Process and Professional Activities for
Discovery of Strengths of Mentally Ill Individuals in
the Psychiatric Social Workers' Practice:
Empowerment – Based Practice in Mental Health

Setsuko SAKAE

The present study examined the association between professional behaviors in assessment process and professional activities for discovery of strengths of mentally ill individuals in the psychiatric social workers' practice. As a result, I found that 'facilitation of client's self - determination' and 'data collection concerning crisis intervention' in assessment practice were strongly associated with 'improving client's strengths in an individual level,' 'developing a sense of citizen rights in a community level,' 'creating network in a community level,' and 'developing appropriate environments among a client' in discovery activities. In addition, 'observation of group work dynamics' 'performing for creating trust with a clients' in assessment practice were associated with 'forming mutual support among clients in a group level' in discovery activities.

Key words: psychiatric social workers,
professional behaviors in assessment process,
professional activities for discovery of strengths